

# 妖怪伝承の背景

堀 哲

## プロローグ

われわれの日常生活の中には、非合理的な要素が様々の形で温存している。これらは通常俗信とか迷信のような範疇として一括されるが、絶対的真理として信じられてきた宗教とか信仰の部類まで冷徹な自然科学の俎上にのぼすと、燦然たる光沢は失せて虚構に化することが多い。このような“虚構”は、日月のような天体から地中の蛆虫にいたるまで、きわめて多様性に富むものであるが、人間自体が対象となることも屢々ある。これらの「人間」は、多くの場合、神々・動物・怪異などと連同したり結合したりして様々な展開を示してきたが、長い年月の間に普遍化と特殊化の繰り返しの過程を経て、独特の民族文化として磨き上げられてくるのである。

今や、ほとんどのものは衰退して、過去の遺物と化したり、伝説に組み入れられたりしたが、まだ民俗の中に鼓動を続けているものもかなりある。

誰しものが幼少時代の憶い出として、花から花へ蝶のようにとびまわる妖精、恐ろしい形相をした悪魔、悪魔の手先となって人畜に害を加えたりする魔女などのすがたを心の奥底に宿していることであろう。

これらは文学の素材としても欠くことのできないもので、古くから神話や伝説として語り継がれてきた。中世にはアーサー王伝説などにとり入れられ、シェイクスピアの諸作品やスペンサーの *The Faerie Queene* (『仙女王』) などによって審美的価値づけの対象にまでなった。それらの内容は多くの学者によって詳細に探究され、筆者自身も「イギリスにおける異教的要素」(『中京文学文学部紀要』11-2, 1976) のなかで触れてきたことであるが、ここではこのような妖怪類の系譜をたどり、その背景について考究を

加えたい。

## 1. 神話・伝説からの考察

British Isles (以下「イギリス」と表記する)においてキリスト教伝導以前のいわゆる異教の神話は、ケルト系とチュートン系に大別される。ケルトの宗教の特色は漠然とした不安感や無限への憶れに根ざしている。その根幹をなす Druid の信仰は、他界を「あの世」ではなく、住民の生活に密着した「この世」に求めたが、それはケルト族の住地が美しい景観に恵まれていたため、詩的情緒豊かな民族性を醸し出し、彼らの民間伝承にも他界が美しいユートピアとして表わされている。彼らは死者さえも美化して、この永遠の楽土に遊ぶ fairy の一員につけ加えたのであった。これに対してチュートン族の心性は現実的で、この世の安寧をも、世界の永遠性をも信ぜず、灰色の雰囲気包まれていた。しかしチュートン族の世界観もケルトの文化や血に交わることによって神秘の感情に色濃く染まって行ったのである。

彼らの奉じた神々は、ギリシアや日本の神話における神々のように主神を中心とした社会構成をなし、職能的でもありまた多分に家族的でもあった。古くはタキトゥスの *De Origine et Situ Germanorum* (『ゲルマニア』)などに述べられているが、Edda 神話では運命の女神のほか、Odin を主神とした神々の運命を悲劇的に扱っている。

創造神話では、巨人 Ymir が神々に殺され、その体から世界が生じ、その後世界は3つに分かれてそれぞれに神々・人間・巨人が住み、神々と巨人が対立抗争するというプロットをとっている。しかし Odin をはじめとする神々の母が巨人の娘ということから推しても、もともとは神と巨人の間の区別は根本的なものとはいえない。

ここでは人間は神々によって作られ、神々に従属すべき状況におかれていたので、巨人とは対立的な関係にあったわけである。この神話の結びとしては、Ragnarok (世界の終末) が訪れ、神々は巨人に倒され、世界そのものが終焉するということになるが、人間は最後まで重要な意味をもっていなかった。

妖精や小人もこの神話世界に属するが、きわめて付随的な地位にある。彼らは神々が巨人 Ymir の体で大地を作ったとき、地中にもぐって肉の中に巣食う蛆のような存在とされた。彼らは巨人とちがって神々や人間に対して必ずしも敵対的な立場にあったわけではなく、あたかも野末に生息する小動物のようにいずれにも従属せずに自己の生活圏をひっそりと守っていた。

このような神話の原形は、おそらくケルト族、チュートン族の共通の祖先であるゲルマン民族がまだ東ヨーロッパの森林地帯に居住していたころに形成されたものであろうが、それぞれがイギリスにもたらされたときには相当に変質したものになっていたであろうし、神々や巨人の勢威もかなり衰えていたにちがいない。

## 2. 史的 背景

イギリスにケルト族が出現したのは紀元前500年ごろとみなされ、そのころからこの島にも鉄器時代が始まる。それまではこの島に住んでいたのはビーカー人とよばれるイベリア族の一種族で、彼らが構築した stone-henge は遠くから眺めるとあたかも彼らを象徴するような brown dwarf (黒い小人) のように映るであろうが、一方このような巨大な造営物をなしとげた力を評価して、巨人としても描かれている。

一般に種族の異なる民族が接触すると、お互いに過大視または過小視する傾向があるが、わが国のスクナヒコナ神・かぐや姫・一寸法師などの話とかダイダラボッチ (巨人) 伝説などはこれに類するものであろう。

ケルト族による支配体制が確立すると、先住民たちはケルトの社会組織に組み入れられ、前一世紀までに全ブリテンは完全にケルト化されるに至った。

ところが前55年からこの島にローマ軍が上陸して、やがて3世紀半に及ぶ軍政が布かれることになるのであるが、ここにケルト族は被征服民の立場を甘受せざるを得なくなってくる。ローマ帝国の衰退に伴ってローマ軍団が徹収するや、そこにケルト社会の復活を見ることとなったが、そのころからチュートン族の一派であるアングロ・サクソン族が海峡を渡って侵

略・移住を活発化し、やがて再びケルト族は被征服民に堕し、この状態は現今にまで及んでいる。

もともとケルト系の妖精の原像は、ケルト族に侵略された先住民にまつわるものであったが、やがてケルト族自身がローマ軍やアングロ・サクソン族によって支配されるようになってくると、彼ら自身も *fairy realm* (妖精の王国) に組み入れられるという経過をたどる。従ってケルト系の妖精といっても、歴史的には2つの異質な層を含んでいるわけで、たとえば原住民のイベリア族は、ちょうど鉄器をたずさえて大陸から渡ってきた侵入者に屈服した日本の原住民と同じように金物を極度に嫌うが、これに対して鉄器をもたらししたケルト文化では、被征服民となって「妖精化」されてからも、さらに拍車をかけて鍛冶業のような仕事に従事するようになり、妖精の性格を多様化した。

アングロ・サクソン族がもたらししたチュートン系の妖精群は、キリスト教化されてからは彼らの支配域から追放されてケルト文化圏に迎えられ、そして吸収融合されて、現在みるような「イギリスの妖精」として形成されるようになるのである。

### 3. キリスト教伝導による変容

2つの個が相接すれば、そこに多少の程度の差を含みながらも作用と反作用が生ずるものである。ましてや、それらが人間の場合、複雑な様相を醸し出しながら対峙することとなる。ホップスは *Homo homini lupus est* (人は人に対して狼である) と説いたが、それは単に個の間だけではなく、個と集団さらには集団と集団の間において、なお一層活発な展開を示す場合が多い。

人類の歴史を瞥見すると、古今東西このような例は枚挙にいとまないが、これを質的な面に視点をあてると、もっとも持続性があり、そして濃度の強いものは精神的領域に求められよう。

人間が神を創造し、そしてこれをして個および所属集団の行動を規制せしめるようになってから1万年以上の年月が流れた。この間に神は人間のあらゆる精神的領域を支配するようになり、個は各自が奉ずる神を中心と

した信仰集団の一員となることを余儀なくされてきた。神自身も文化の類型に伴って多様な表出をするようになるが、構造的には排他的な一神教と共存的な多神教とに大別される。

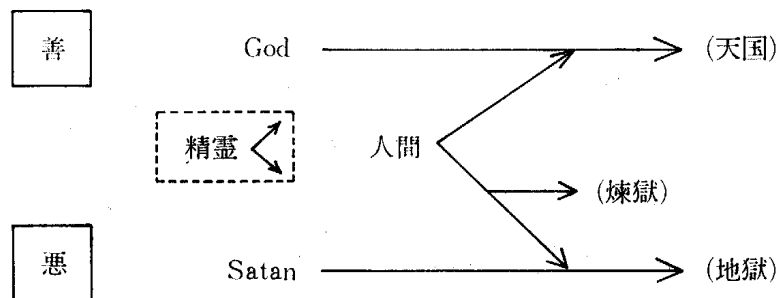
ここに相異った神を奉ずる信仰集団が接触する場合をとり上げると、①前者同士、②前者と後者、③後者同士と3つの場合が考えられるが、当然のことながら①はキリスト教とイスラムの争いにみるように天を同じうすることができないほど熾烈なものであり、②はイスラムのインド侵入とか白人によるアメリカ原住民征服などの諸例にみるように、前者が後者を制圧するかまたは後者が前者を包摂するという経過をたどる。③は仏教の伝播にみるように比較的平和裡に浸惨がなされる。それはあたかも前者を肉食性動物、後者を草食性動物におきかえて眺めれば具体的に把握し得ることと思う。イギリスにおける妖精を問題とする場合、この②があてはまる。

この島にキリスト教が入ってきたのは、ローマ軍統治下にさかのぼるが、本格的に伝導が始まったのは、ローマ軍徹収後、異教を奉ずるアングロ・サクソン族が一応の政治的支配権を確立してからであった。6世紀末にアウグスティヌスがローマ教皇の勅命を受けて来島し、やがてケント王エセルベルト自らも洗礼を受けるに至り、キリスト教は公教としての地位を確保したのである。それはちょうどローマ帝国のパンテオンにキリスト教が入りこんだのと同じように、はじめは諸神の一つとして橋頭堡を築き、やがて他のすべてを駆逐して独占の地歩を固めたのである。その間には *Beowulf* や *Edda* などにみられるような若干の抵抗もあったことだろうが、当時のイギリスのように、生活そのものが変動期にあり、また彼らの伝来の神々の勢威が衰えていた折でもあったので、キリスト教への移行は順調に進み、それだけに徹底的に行われた。神々の聖域はそのままキリスト教の教会に移行し、また多くの伝統行事はキリスト教の教会暦に組みこまれた。

ここでキリスト教の為政者が一番意を用いたのは、異教の神々とその信奉者への対策である。いかなる形にせよ、一神教の体制の下では、彼らが奉ずる異教の神々はすべて「悪」の名を冠して葬り去らねばならない。そ

ここでここに善悪の倫理体系を導入するわけであるが、旧約聖書に盛られた God の対立概念として Satan をとり上げ、異質の文化圏の deity・demon・devil との対応と図ることとなった。

図1. ヘブライズムの構図



(図1)にみるように、ヘブライズムの倫理構造は整然とした二元論に立つもので、善と悪は明確に分けられ、God と Satan がそれぞれの世界を主宰するが、人間はその中間にあり、その所業によって天国に迎えられ、地獄に落ちるかが定められる。ここでは God に不服従なもの、反逆するものはすべて悪であるので、神話における神々・人間・巨人という三分界は根底からくつがえされたのである。

ヘブライズムによる強固な支配によって、異教的要素はほぼ完全に駆逐されるか、または換骨されてしまった。ゲルマンの神々は「悪魔」という名で一括され、一部はキリスト教ないしはギリシア・ローマ文化と共に導入された魔的形象と混和して Satan のイメージに成長した。この神々の信奉者たちも異端の徒として迫害・宥和両面にわたる政策により、前者は悪魔の手先すなわち魔女とか小悪魔となり、後者は妖精として順化されてきた。彼らの聖なる集会は、witches' Sabbath (年一回深夜に悪魔が開く酒宴) として迫害の対象となり、悪の温床として可能な限り誇張された形容が施された。

神話時代には力溢れた知恵者として神々と対峙していた巨人は *Jack-the-Giant-Killer* (『ジャックと豆の木』) やワイルドの 'The Selfish Giant' *The Happy Prince and Other Tales* (『わがままな巨人』『幸福な王子』) などに表わされた間のぬけた臆病者に墮し、小人などと共に妖精群の一員

に組み入れられるような経過をたどる。

図2. 神々の世界から異教グループへの変展

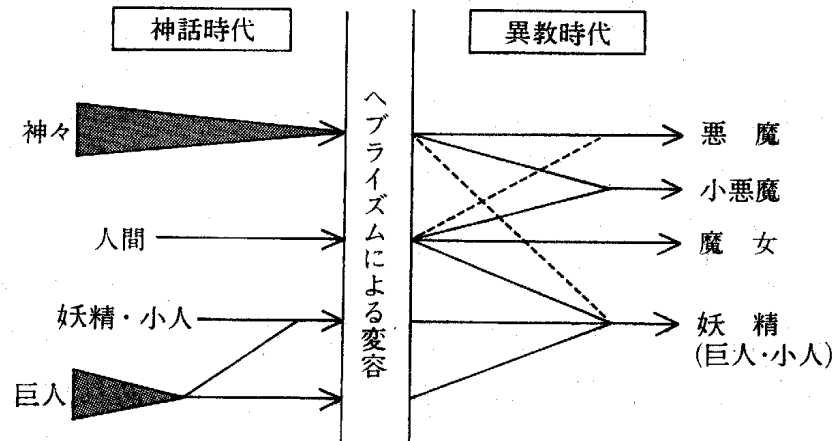


図2はヘブライズムというフィルターを通して神話の世界が異教グループへと変展した過程を示すものであるが、ここには新勢力に屈服または融和してその体制に吸収されて行った系統は含まれていない。

日本でも先住民が征服民によって非人間＝怪異あつかいにされた例がかなりある。伝説のなかにしばしば登場するオニなどもその例の1つであるが、イギリスの妖怪のように先祖伝来の地を追われて、山とか森のような場所に逃げかくれ、時に応じて里に現われて「人間」と交渉をするという通性をもっている。しかし多神教の文化圏ではイギリスのようにその原動力が信仰に根ざしているのではないので規制力は緩やかである。日本文化の基層ともなっている「山の神」と「田の神」との間の共存・調和は、対立の焦点が民俗のなかに吸収され、年中行事化されて行ったプロセスを見事に示している。イギリスにもクリスマスやメーデーなどの行事にキリスト教以前の習俗が多分に含まれてはいるが、異教の痕跡はほとんど涸渇している。

日本の場合は「かくし念仏」とか「かくれ切支丹」のような若干の例外は認められるとはいえ、抗争のほとんどは世俗的な原因によるものであり、強いてイギリスにその類似を求めれば、ケルト族がイベリア族を、そしてアングロ・サクソン族がケルト族を制圧したときぐらいが挙げられるにすぎない。

#### 4. 東西文化比較の視点から

A. トインビーが指摘した西洋文化の根本的特質である「キリスト教のみが宗教であり、ヨーロッパのみが世界である」という尺度は、自己の固有文化に対する完全な破壊の上に樹立されたものといえよう。とくにゲルマン系諸族にとって、祖先伝来の神々は根こそぎに取り上げられ、その代りに異郷アジアの砂漠の思考形態がセットとしてあてがわれたのである。すなわち一神教とくにキリスト教のような排他的な宗教では、他との並存は許されない。旧約聖書出エジプト記の十誡の冒頭を飾る **Thou shall have no other gods before me** (汝、我の外に何物も神とする勿れ) という激しい表現は、多神教の中にみられるような寛容とか妥協は一切影をひそめる。

このような状況の下に、イギリスで何故このように妖精を中心とした妖怪伝承が形成されて行ったのか、同じようにユーラシア大陸に対置された小島である日本との比較において一考したい。

日本列島に仏教が伝播したのは、ブリテン島にキリスト教が伝播したのとほとんど同じ時期である。いずれも民族宗教に対する世界宗教の侵入という共通項でまとめることができるのであるが、根本的な差異はその侵入者が前者では多神教、後者は一神教によるものであるということである。仏教のような多神教ないしは汎神教では、その布教方針は一神教と較べてはるかに寛容であり、今でも日本中いたるところでみられるような在来神の神社と伝来神の仏寺が並存しているという現象は、イギリスでは到底考えられないことである。

ヨーロッパでは中世から近世にかけて行われた「魔女裁判」のような異端迫害は、日本においては例示する材料に乏しいが、むしろ同時代に真言密教と結びついて跳梁した天狗などの魑魅魍魎のたぐいの方が刮目に価する。これらは宗教組織の深部にまで食い込み、その宗派と盛衰を共にする場合が多い。

一神教の文化圏ならためらいもなく一掃されているような異教の廃墟は、日本ではさしずめ「神々の死骸」というような形でいまだに放置され、それが怪異たちの生息・跳梁の場ともなっている。これらは、くせ地



・忌み地・崇り地・呪地などによばれて畏怖され、その“聖域”には所属信仰集団のあまたの残存・断片が蠢いているのである。

田の神に由来するキツネ、水神の変容とされる河童なども薄気味悪いイメージを拭い去ることはできないし、イギリスの妖精などにみられる明るさに欠けている。これは妖精などが早い時代に宗教と絶縁して信仰の翳を除去したことが主な原因と考えられる。

日本の妖怪たちは、信仰というかさぶたを背負ったまま現代の文明社会に入りこんでしまったが、それはちょうど権力と結びついた王制のようなもので、もし健全な延命を望むなら、権力から離れて象徴的存在に転進することであろう。

#### 参 考 文 献

- 小口偉一・堀一郎（監修）『宗教学辞典』東京大学出版会，1973  
大野真弓『イギリス史』山川出版社，1975  
グレンベック，山室静（訳）『北欧神話と伝説』新潮社，1975  
フロスト・ドラットル，井村君江（訳）『妖精の世界』研究社，1977  
キャサリン・M・ブリッグズ，井村君江（訳）『妖精の国の住民』研究社，1981  
K.M.Briggs, *The Fairies in English Tradition and Literature*, London, 1968  
Anne Ross, *Pagan Celtic Britain*, London & New York, 1968  
Ward Rutherford, *The Druids & Their Heritage*, Gordon & Cremonesi, 1978

## Background to Fairy Traditions

SATOSHI HORI

**SUMMARY**—The popular idea of fairies is that of a supernatural race existing in the fancy of the folk of North and West Europe. In folklore as well as formal literature, fairies are inhabitants of the so-called fairyland, an underworld often localized under a hill and near a forest.

Many explanations have been given to account for belief in fairies. Some people have thought that fairies are a special creation existing in their own right. On the other hand, like ghosts, they may be spirits of the dead, or of certain types of the dead such as people who died unbaptised or stillborn babies. From the religio-ethnological point of view, fairies have been regarded as the descendants or the believers of pre-Christian gods and goddesses. There is little difference in attributes, characteristics, and actions between Celtic fairies and Teutonic or Scandinavian elves, dwarfs, and trolls; and much the same cycle of stories and beliefs is common to both.

Traditionally in Britain, they may have evolved from far-off memories of a Stone Age race which once lived in the British Isles. Long after this race had died out, or had become absorbed into the population, the memory of those characteristics lived on in Celtic tales.

Even though some fairies remain in memories of ancient pagan gods and nature spirits, others may have the ability to survive and be indestructible.

In polytheistic culture areas, especially like in Japan, spirits

or fairy-like beings have been more or less closely connected with their own religious structure and shared their fortune with it. In many cases we can hardly find here such a pretty butterfly-winged and innocent miniature, which exists in Britain.

Here I draw some instances about Japanese sprites and try to compare them with British fairies.